

ラムサール・ネットワーク日本  
—水辺の生命と暮らしのネットワーク—  
設立趣意書

日本や韓国をはじめ東アジアの国々は、かつては湿地を賢明な方法で利用していた。湿原には水田がつくられ持続的な農業が営まれ、河川や湖沼は内水面漁業や舟運に利用され、遊水池、貯水池として治水、利水の役割も担っていた。干潟や藻場、浅海域、サンゴ礁では持続的な沿岸漁業が営まれ、豊かな漁獲があり多くの海産物が得られた。これらの湿地には、栽培植物や漁獲対象種ばかりでなく、様々な生物が数多く生育、生息し、湿地の生物多様性を保持し、水辺の生命と暮らしのつながりを形作ってきた。

しかし、国家政策として、第一次産業よりも製造業や重化学工業による経済発展が重視されるようになると、湿原や干潟は埋め立てられ、工場用地や住宅地などに姿を変えていった。減反政策で水田面積が減少し、一方では、農薬が多用され生物相は貧弱になった。各地で湿地を守る市民運動がくり広げられ、いくつかの湿地は保全されたが、多くの重要な湿地が失われている。

私たちは、2008年3月に「ラムサール COP10 のための日本 NGO ネットワーク」を設立し、韓国の NGO とともに「世界 NGO 湿地会議」（2008年10月）を開催し、スンチョン NGO 宣言の採択、「世界湿地ネットワーク（WWN）」の発足、地域に根ざした NGO のかつてない協力、協働の広がりなど、大きな成果を上げた。また、続いて開催された第10回ラムサール条約締約国会議に参加し、「水田決議」の提案と採択など、NGO の立場で条約の実行と湿地の保全に貢献した。

私たちは、「ラムサール COP10 のための日本 NGO ネットワーク」の活動によって得られた成果を引き継ぎ発展させることが、日本の湿地保護運動にとって不可欠であるとの認識と合意に至ったことから、その後継組織として「ラムサール・ネットワーク日本」を設立し、地域に根ざした湿地保護運動を継続し発展させることを決意した。

「ラムサール・ネットワーク日本」は、日本各地で、湿原、河川、湖沼、水田、ため池、砂浜、干潟、浅海域、サンゴ礁、マングローブ林などの湿地にかかわる地域の環境 NGO や個人から成り立っている。その目標は「地域の草の根グループと連携し、湿地にかかわる NGO のネットワークを運営し、ラムサール条約にもとづく考え方・方法により、すべての湿地の保全、再生、賢明な利用を実現する」ことである。この目標を実現するため、地域の湿地 NGO、世界の NGO と連携し、ラムサール条約を有効に活用し、政策提言を行い、農林漁業との関係を重視し、一般への普及教育をすすめるなど、多くの行動が必要とされている。

私たちは「ラムサール・ネットワーク日本」を広く会員に開かれた組織として設立し、各地域で湿地保護に活動する多くのグループ、個人の意見を取り入れ、その活動を世界につなぎ、湿地の生物多様性を守り、賢明に利用し、未来の世代に引き継いでいきたいと考えている。

2009年4月29日  
「ラムサール・ネットワーク日本」設立総会参加者一同